

史跡大覚寺御所跡

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 二〇〇六―三五

史跡大覚寺御所跡

2007年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

史跡大覺寺御所跡

2007年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都には数多くの有形無形の文化財が今も生き続けています。それら各々の歴史は長く多岐にわたり、京都の文化の重厚さを物語っています。こうした中、地中に埋もれた文化財（遺跡）は今は失われた京都の姿を浮かび上がらせてくれます。それは、平安京建設以来 1200 年以上にわたる都市の営みやその周りに広がる姿をも再現してくれます。一つ一つの発掘調査からわかってくる事実もさることながら、その積み重ねによってより広範囲な地域の動向も理解できることにつながります。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、こうした成果を現地説明会や写真展、考古資料館での展示、ホームページでの情報発信などを通じて広く公開することで市民の皆様へ京都の歴史像をより実態的に理解していただけるよう取り組んでいます。また、小学校などでの地域学習への成果の活用も、遺物の展示や体験授業を通じて実施しています。今後、さらに埋蔵文化財の発掘調査成果の活用をはかっていきたいと願っています。

研究所では、平成 13 年度より一つ一つの発掘調査について報告書を発刊し、その成果を公開しています。調査面積が十数平方メートルから、数千平方メートルにおよぶ大規模調査までありますが、こうした報告書の積み重ねによって各地域の歴史がより広く深く理解できることとなります。

このたび防災施設工事に伴う史跡大覚寺御所跡の発掘調査成果を報告いたします。本報告書の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示たまわりますようお願い申し上げます。

末尾ではありますが、当調査に際して御協力と御支援をたまわりました多くの関係者各位に厚くお礼と感謝を申し上げます。

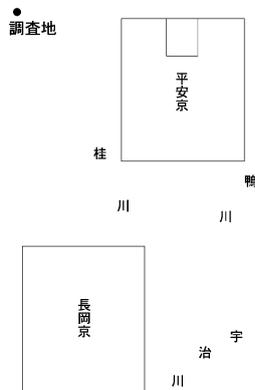
平成 19 年 3 月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 川 上 貢

例 言

- | | |
|----------|---|
| 1 遺 跡 名 | 史跡大覚寺御所跡 |
| 2 調査所在地 | 京都市右京区嵯峨大沢町 4 番地 |
| 3 委 託 者 | 宗教法人大覚寺 代表役員 坂口博翁 |
| 4 調査期間 | 2006 年 6 月 5 日～ 2007 年 1 月 25 日 |
| 5 調査面積 | 60 m ² |
| 6 調査担当者 | 前田義明・吉村正親・堀内寛昭 |
| 7 使用地図 | 京都市発行の都市計画基本図（縮尺 1：2,500）「北嵯峨」を参考にし、作成した。 |
| 8 使用測地系 | 世界測地系 平面直角座標系VI（ただし、単位（m）を省略した） |
| 9 使用標高 | T.P.：東京湾平均海面高度 |
| 10 使用基準点 | 京都市が設置した京都市遺跡発掘調査基準点（一級基準点）を使用した。 |
| 11 使用土色名 | 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。 |
| 12 遺物番号 | 通し番号を付し、写真の番号も同一とした。 |
| 13 掲載写真 | 村井伸也・幸明綾子 |
| 14 基準点測量 | 宮原健吾 |
| 15 本書作成 | 前田義明・吉村正親・堀内寛昭 |
| 16 編集・調整 | 中村 敦・児玉光世・山口 眞 |



(調査地点図)

0 2 4km

目 次

1. 調査経過	1
2. 位置と環境	1
3. 周辺の調査	2
4. 発掘調査の概要	4
5. 立会調査の概要	5
(1) 遺 構	5
(2) 遺 物	7
6. ま と め	10

図 版 目 次

図版1 遺構	1 調査区全景（南西から）
	2 No.23-7地点 土壙1（北から）
図版2 遺構	1 No.25-4地点 埋甕（南から）
	2 No.27-7地点 土壙2（西から）
図版3 遺物	出土瓦類

挿 図 目 次

図1 調査地位置図（1：5,000）	1
図2 調査前全景（北東から）	2
図3 作業風景	2
図4 調査区配置図（1：1,600）	3
図5 遺構実測図（1：80）	4
図6 柱状図（1：20）	6
図7 遺構実測図（1：20）	7
図8 瓦類拓影・実測図（1：4）	8
図9 土器実測図（1：4）	9
図10 常滑甕実測図（1：4）	9

表 目 次

表 1	遺構概要表	5
表 2	遺物概要表	9

史跡大覚寺御所跡

1. 調査経過

この調査は、大覚寺防災施設工事に伴う埋蔵文化財発掘および立会調査である。調査範囲である大覚寺境内は史跡に指定されている。そのため、防災工事に伴う埋設管の管路部分については立会調査、増設貯水槽部分については発掘調査を行うことを、京都府並びに京都市文化財保護課が指導し、調査を財団法人京都市埋蔵文化財研究所が委託を受けて実施することとなった。調査に際しては遺構保護の観点から、調査の範囲および深度も工事で壊される部分に限定する指導を受けた。

発掘調査は境内北西部にある乾倉北側に予定されている貯水槽部分について実施した。調査では掘削深度に制約があったため明確な遺構は検出できなかった。また、立会調査については掘削深度の関係で掘削深以下の観察は行えなかったものの、境内全域わたる整地層の状況や中・近世の遺構を確認することができた。

2. 位置と環境

大覚寺は、北嵯峨大沢池の西に位置し、嵯峨天皇の離宮であった嵯峨院を、貞観十八年（876）に嵯峨天皇の皇女正子内親王（淳和太后）が寺に改め「大覚寺」としたのが始まりである。開山は淳和天皇の第二子（恒貞親王）恒寂入道親王である。鎌倉時代には後嵯峨・亀山・後宇多の三上皇が相次いで入住し、中でも後宇多上皇は延慶元年（1308）に寺内の蓮華峰寺を仙洞御所（嵯峨御所）として用い院政を行った。南北朝時代には大覚寺統（南朝）の中枢として隆盛を誇ったが、室町時代の応仁二年（1468）に勃発した「応仁の乱」によって伽藍の大半が焼失し、一時荒廃した。その後、桃山時代には織田信長や豊臣秀吉の寺領寄進によって復興を遂げ、江戸時代にも徳川家康の庇護や後水尾天皇の寄進などがあり門跡寺院として伽藍が整備された。ところが、江戸時代末期には衰退し、明治初年には一時無住となった。しかし、47世門跡玉諦、48世門跡龍暢らの尽力で復興を遂げ、

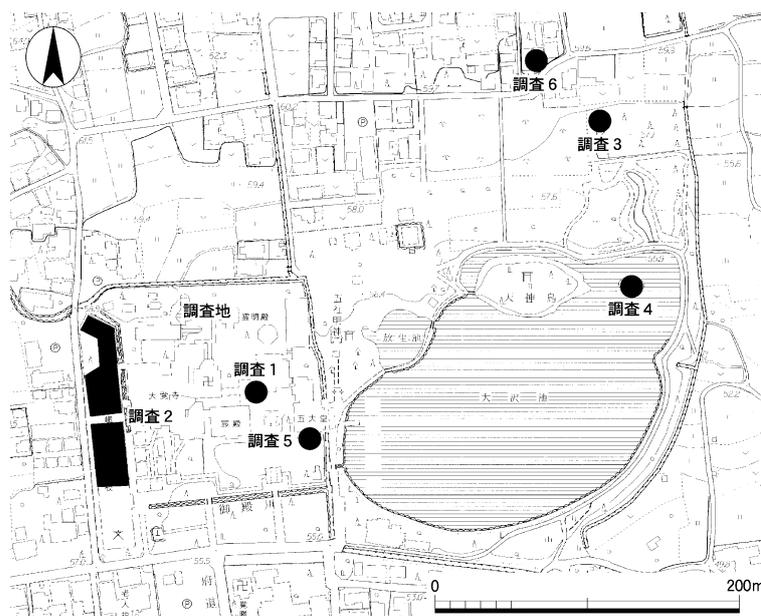


図1 調査地位置図（1：5,000）



図2 調査前全景（北東から）



図3 作業風景

現在、真言宗大覚寺派の寺院となっている。史跡・遺跡の範囲もその歴史に則って、嵯峨院跡、史跡大覚寺御所跡、名勝大沢池附名古曾滝跡として指定されている。

3. 周辺の調査

大覚寺境内およびその周辺では、これまでも数次の調査が実施されている。ここでは主な調査とその成果を示す。

昭和50年度調査（調査1）境内の北東部、大沢池に近い地点で大日堂、聖天堂移転に伴って、鳥羽離宮跡調査研究所が調査を実施している。この調査では平安時代中期の庭園遺構の一部と見られる庭石や中世の敷石遺構が検出された。遺物では「大井寺」と陽刻された軒平瓦が出土し、注目されている。

平成3年度調査（調査2）境内の西端で、信徒会館新築工事に伴って当研究所が調査を実施している。調査は南北2箇所調査区、約1,500㎡を設定して実施し、平安時代から江戸時代の5期にわたる遺構群を検出している。中でも調査区の北端で検出した平安時代の池状遺構は、底部に長さ4m、径0.35mに及ぶ栗の割材を据え、汀には径0.4～0.5mの石材多数を積み上げている状況であった。この池には東側から流れ込む溝が付属し、さらにその南側には1棟の掘立柱建物が建っていたと見られている。これらの遺構の性格は不明であるが、嵯峨院や大覚寺の実態を考察する上では重要である。

大沢池周辺の調査（調査3）大覚寺の東側に広がる大沢池は、嵯峨天皇の離宮嵯峨院の庭園に広がっていた庭池の名残と伝えられている。この北側には平安時代初期に遡る名古曾滝跡があり、この復元整備を目的に調査が実施されている。調査は大沢池整備委員会によって昭和59年から平成2年の7箇年にわたって実施され、名古曾滝から大沢池に至る遺水などが検出された。この調査によって嵯峨院の庭園の一部が明らかとなった。

平成7年度調査（調査4）調査3に関連して大沢池北部に存在する菊の島とその周辺に点在する庭湖石とよばれる景石を当研究所が調査している。この調査によって菊の島は室町時代に形成されたものであることが明らかとなった。

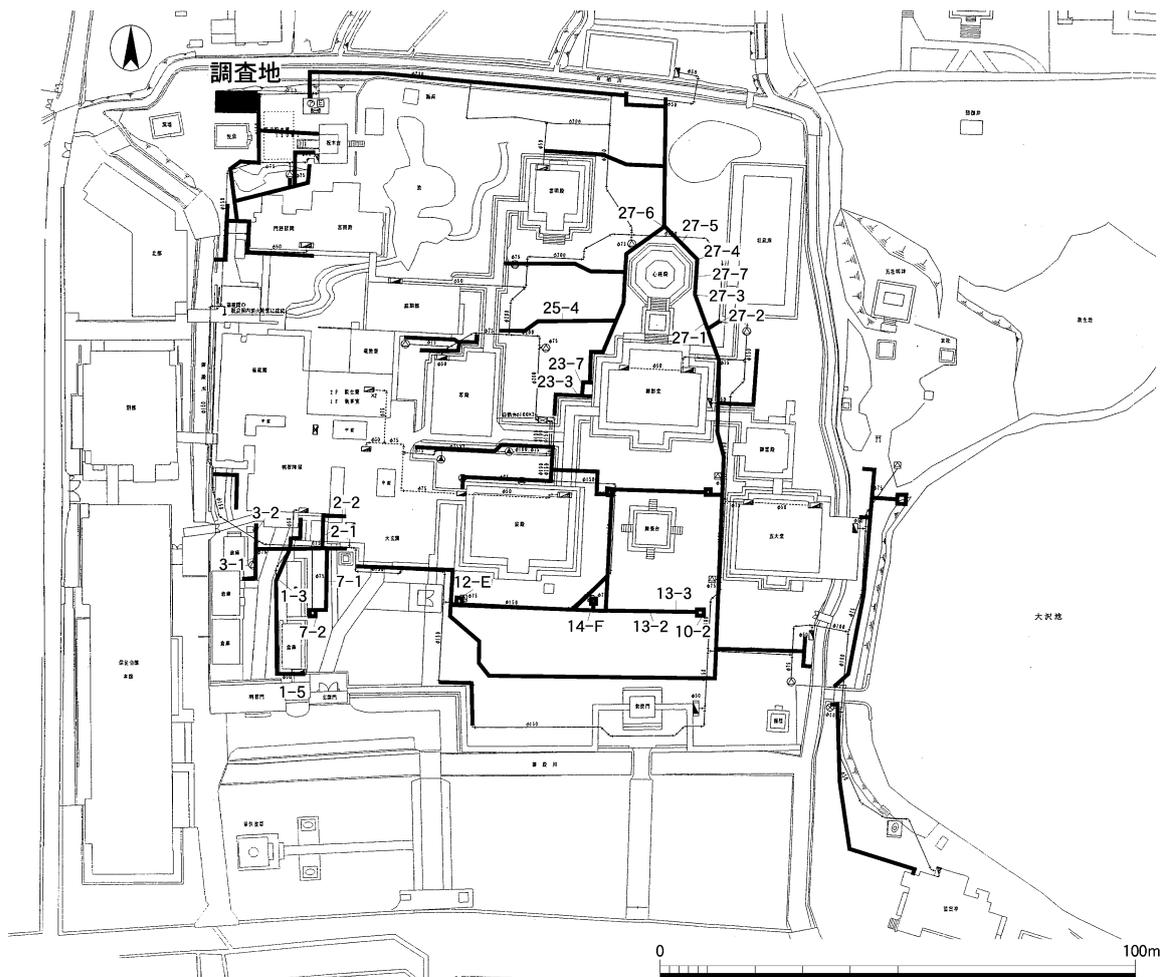


図4 調査区配置図（1：1,600）

平成14年度調査（調査5）御影堂と御霊堂の改修工事に伴って当研究所が調査を実施している。調査は旧御影堂と御霊堂の周辺に6箇所の調査区を設けて実施した。この内、南側に配置した1トレンチでは熨斗瓦あるいは半截した平瓦を並べた遺構を、また、2トレンチでは基壇の一部とみられる東西方向の石組みを検出している。これらは天明年間（1781～89）に建立された本堂の地業に関連した遺構と考えられる。

その他の調査（調査6）大覚寺の周辺では平成3～4年に公共下水道に伴う立会調査が実施されている。これらの調査で名古屋滝の北側で平安時代前期の土壌を確認しており、土器類を採集している。土器類には土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器などがあるが、特に緑釉陶器の比率が高く、しかも大半が供膳形態であった。その状況から、これらの遺物は嵯峨院に関連する遺物であろうと推測されている。

以上、大覚寺およびその周辺で実施された調査によって、嵯峨院から大覚寺に至る遺構が遺存していることが明らかになった。参考文献は、以下の通りである。

調査1 「大覚寺境内埋蔵文化財発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報集 1976』鳥羽離宮跡調査研究所 1976年

調査2 堀内明博・高正龍「史跡大覚寺御所跡」『平成3年度 京都市埋蔵文化財調査概要』

財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1995 年

調査3 『史跡大覚寺御所跡発掘調査報告 - 大沢池北岸域復原整備事業に伴う調査 -』 大覚寺
1994 年

調査4 南 孝雄ほか「史跡大覚寺御所跡・名勝大沢池附名古曾滝跡」『平成7年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1997 年

調査5 出口 勲・鈴木廣司「史跡特別名勝大覚寺御所跡」『平成14年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2004 年

調査6 小檜山一良「嵯峨院跡・史跡大覚寺御所跡」『平成5年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1996 年

4. 発掘調査の概要

防火水槽建設予定地である境内北西部、乾倉北側に 5.5 m × 10.6 m (約 60 m²) の調査区を設定して調査を実施した。工事の掘削深度が地表下 0.8 m の予定であったため、調査による掘削深度もこれに従った。

調査を開始した時点で、地表下 0.8 m までは近現代の盛土の中に留まることが明らかとなった。

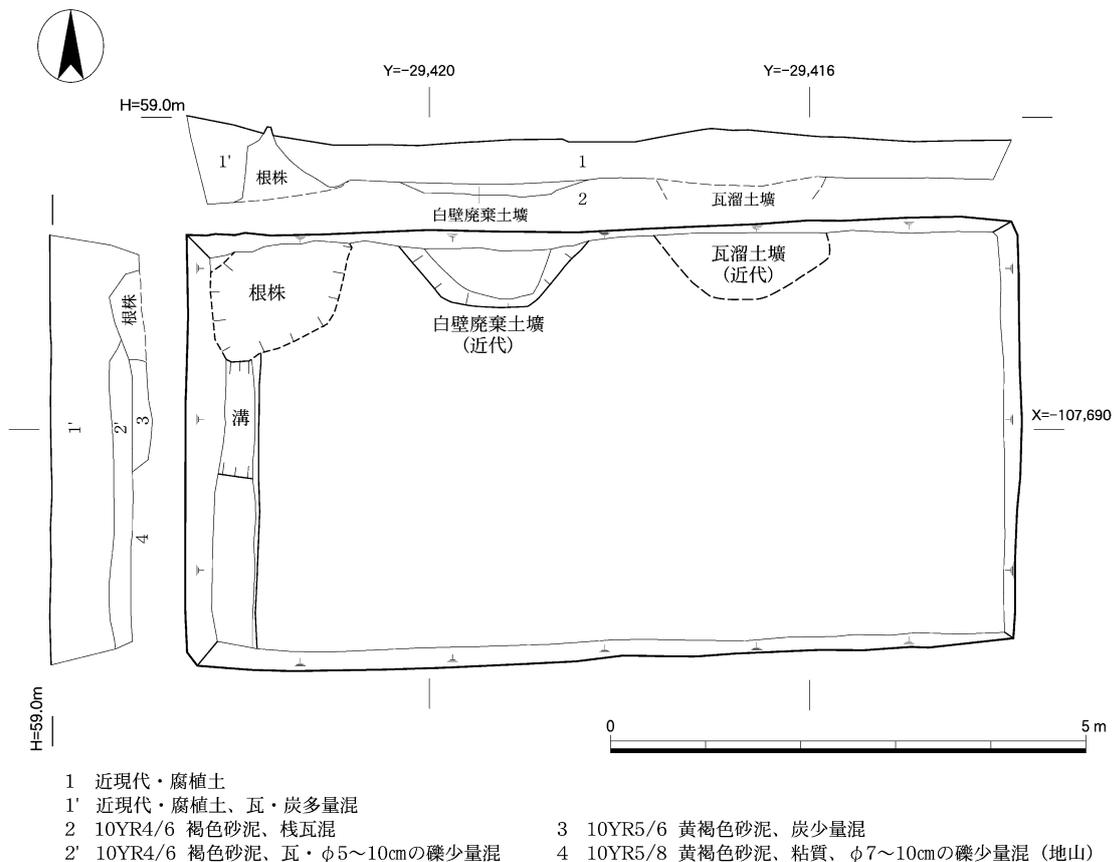


図5 遺構実測図 (1 : 80)

このため、府・市文化財保護課の指導を受け、調査区の西端部を幅 1 m にわたって断割り、下層の状況を確認した。その結果、地表下 0.85 m で黄褐色砂泥（粘質）層からなる地山を検出した。この地山の上面で東西方向の溝を確認したが、これも出土遺物から近世末から近代のものであると考えられる。この他に調査区の北部で埋土に白壁の入る土壘、瓦溜め、調査区南部で棧瓦を並べた遺構を確認したが、いずれも近代のものである。

出土遺物も近世以前のものではなく、近代の巴文軒丸瓦、唐草文軒平瓦、棧瓦が出土している。

今回検出した東西方向の溝は、近世に造営され、現在、大覚寺の北辺を東西方向に区切っている土塁に並行して延びるとみられることから、この土塁の内溝ではないかと考えられる。また、近世以前の遺構・遺物が検出されておらず、周辺は近世以降に削平を受けた可能性がある。

5. 立会調査の概要

立会調査は境内のほぼ全域にわたるため、管路の路線別に No. 1 ～ 32 地区に分けて調査を実施し、観察地点ごとに枝番号を付して記録した（図 4 参照）。なお、図 4 に記した地点番号は、主な土層観察地点である。

（1）遺 構（図 6・7）

層位の状況

埋設管の掘削深度の大半が地表下 0.5 m 程度であったため、地山面の確認に至らずに終わっている調査地点も多く存在する。そのため一様に層序を示すことはできないが、相対的に寺域の北部は地山が浅く、南に行くに従って深くなる傾向にあり、これは旧地形を反映したものとみられる。北部の浅い所では地表下 0.35 m で地山に到達し、南部の深い所では地表下 0.9 m で地山に達するところもある。この間の土層はほとんど近世・近代の整地層であるが、寢殿、御影堂、五大堂の南および No. 27- 7 地点では、中世の遺物包含層を確認した。No. 27 地区のルート No. 27- 1 ～ 6 の一連の土層図を図 6 に示した。

表 1 遺構概要表

時 代	遺 構	備 考
鎌倉時代	埋甕遺構	
室町時代	土壘、井戸状遺構	
江戸時代	暗渠、瓦溜、土壘	

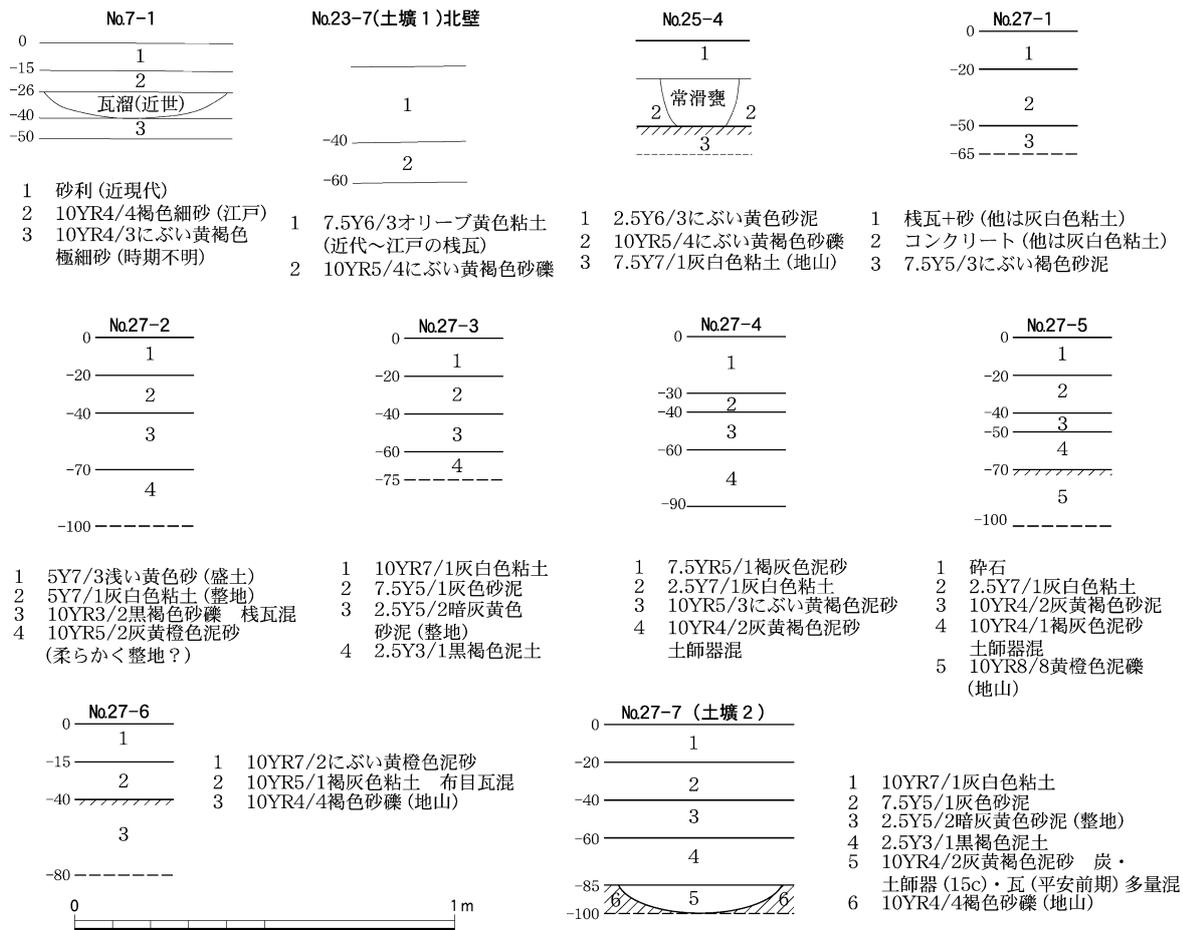


図6 柱状図(1:20)

遺構

以下、主な遺構について地点ごとに概説する。

No. 25- 4 地点霊明館の真南 17.3 mの庭中央部で、鎌倉時代後半の常滑の甕(須恵質)を検出した。重機掘削後の確認であったので、半截された状態であったが、地表下 0.2 ~ 0.45 mの間に立てて据えられていた。当初から口縁部と底部を欠いていたとみられ、掘形はなく整地時に据えられたものと考えられる。

No. 27- 7 地点心経堂の東部分で室町時代中期の土壌(土壌2)を検出した。土壌は地表下 0.85 mにあって地山を掘り込んでいた。埋土からは炭と室町時代の土師器が出土した。なお、この土壌からは平安時代前期の瓦が多く出土しており、これらは磨滅が進んでいた。

No. 7- 2 地点は玄関門を入れてすぐの所に位置する。ここでは西半部を近世の石組溝に壊された状態の井戸を検出した。井戸側を確認できておらず、土壌とも考えられるが、埋土の状況から井戸と判断した。埋土に中世の土師器を含んでいた。

No. 7- 1 地点では、地表下 0.26 mで近世の瓦溜めを検出している。

No. 2- 1 地点は明智門を北に入った奥にある宗務庁入口にあたるが、ここで南西方向に延びる石組暗渠を検出した。内部には砂が詰まり、現在は機能していなかった。また、No. 3- 1 地点でも同様な石組暗渠を確認した。この溝の内部は空洞になっていた。これらの暗渠は境内の雨水を御殿

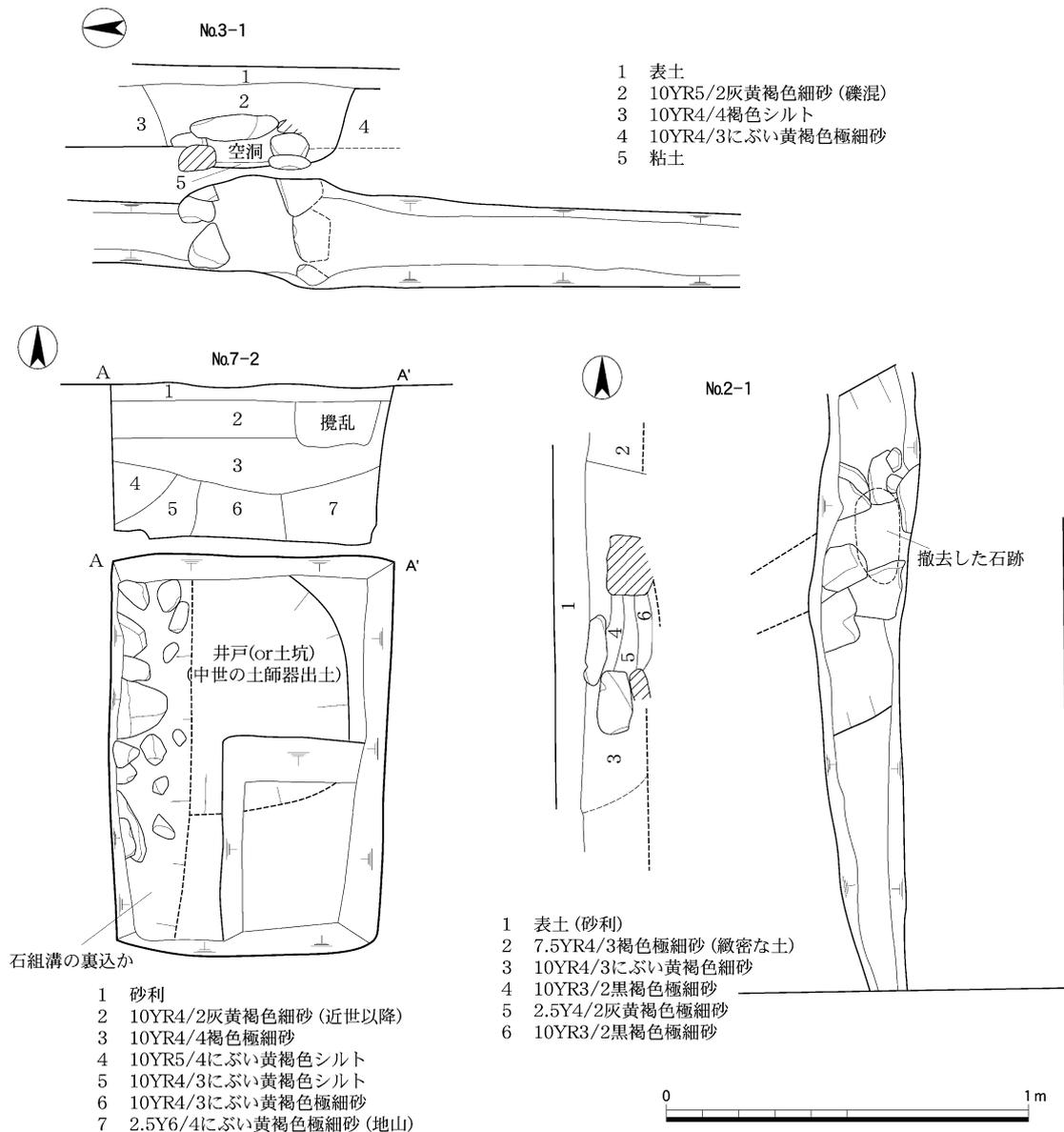


図7 遺構実測図 (1:20)

川方向に逃がすための施設ではないと思われる。

No. 23- 7 地点は放水銃設置箇所、御影堂の西側にあたる。ここで、近世の土壌 (土壌 1) を検出した。土壌には獅子口関係の瓦がまとまって入っていた。

(2) 遺物 (図8~10)

出土遺物は遺物コンテナ 8 箱分であった。

今回の調査で出土した最も古い遺物は平安時代前期の瓦である。No. 27- 7 地点で検出した室町時代中期の土壌 2 から多く出土している。この瓦群には蓮華文軒丸瓦 (10) と唐草文軒平瓦 (11・12) がある。瓦は全体に磨滅が進んでいるものが多いが、11 の唐草文軒平瓦は磨滅が少なく文様も鮮明である。外区に円形の記号「○」が押されている。12 は同文の唐草文軒平瓦で外区に「寺」の印が押されており、「大井寺」銘の瓦ではないかと考えられる。なお、この土壌からは室町時代

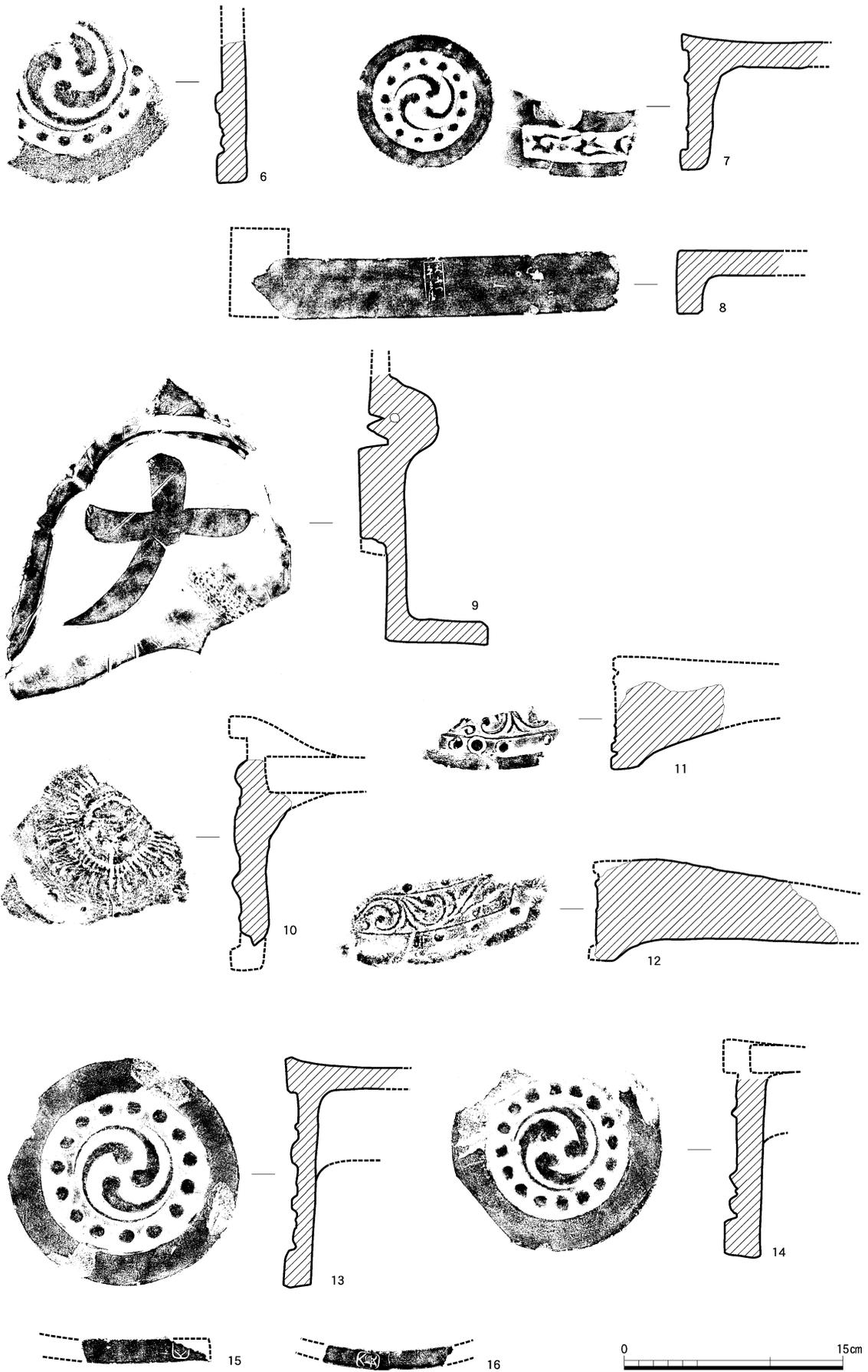


图8 瓦類拓影・実測図(1:4)

中期の土師器皿（5）が出土している。

鎌倉時代の遺物としてはNo.25- 4地点で検出した鎌倉時代後半の常滑産の甕（17）がある。底部と口縁部が当初から欠損している。須恵質を呈し、肩部に自然釉がかかる。

江戸時代の遺物は境内のかなり広い範囲から出土している。以下、調査地点順に内容を記述する。No.1- 3地点の包含層から土師器皿（2）、京焼灯明皿（1）、三巴文軒丸瓦（6）、銭貨、瓦など、No.1- 5地点の包含層から瓦、No.2- 1地点の暗渠からは染付磁器椀、焼締陶器壺、No.2- 2地点の包含層から播鉢と瓦、No.3- 1地点の暗渠からは京焼錆絵椀、No.3- 2地点の包含層からは播鉢と瓦、No.7- 1地点の土壌から瓦、No.10- 2地点の包含層から土師器皿と瓦、No.12- E地点・No.13- 2地点・No.13- 3地点の包含層からは瓦、No.23- 3地点からは三巴文軒丸瓦（7）、No.23- 7地点の土壌1から獅子口瓦が多数出土し、中には「大」と銘の入るもの（9）や雲をあしらったものもある。角瓦（8）も供伴したが使用部位が不明である。前面に「大ふつ」の刻印がある。これらの一群は大覚寺境内の堂舎に葺かれていたものが一括投棄されたものと思われるが、どの建物のものであったかは不明である。（3・4）は江戸時代後半の土師器皿で内面に凹線をはっきり入れるもので、同じく土壌1から出土した。

（13～16）は発掘調査区の盛土から出土した瓦で、江戸時代のものと考えている。（15・16）は丁寧な作りで端面に「八長」の刻印が押されていた。瓦屋の屋号を表しているものと思われる。

（13～16）は発掘調査区の盛土から出土した瓦で、江戸時代のものと考えている。（15・16）は丁寧な作りで端面に「八長」の刻印が押されていた。瓦屋の屋号を表しているものと思われる。

表2 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
平安時代	瓦		瓦3点		
鎌倉時代	常滑甕		常滑1点		
室町時代	土師器、瓦		土師器2点		
江戸時代	土師器、焼締陶器、京焼、染付磁器、瓦類、銭貨		土師器2点、京焼1点、瓦8点		
合計		10箱	17点（2箱）	8箱	0箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より2箱多くなっている。

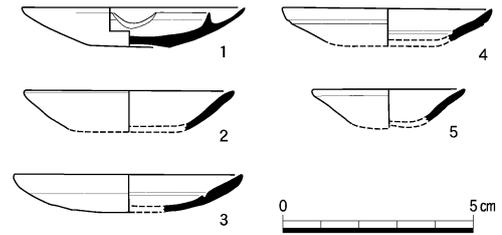


図9 土器実測図（1：4）

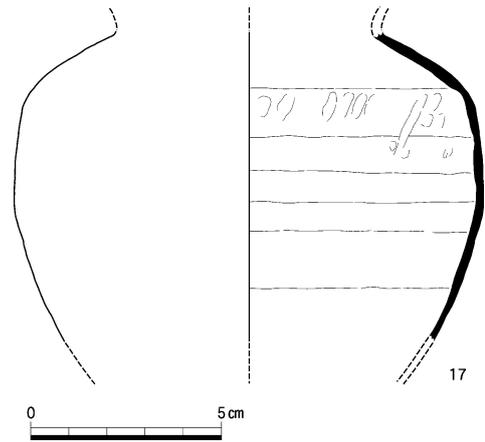


図10 常滑甕実測図（1：4）

6. ま と め

今回の調査は、工事の掘削深度に規制されたため、土層や検出遺構の詳細な検討に制約を受けたが、調査範囲が寺域全域に及んだため、寺域内の土層堆積状況の大枠をとらえることができたことは大きな成果である。すなわち、寺域の北部は地山が地表下0.35 m前後と浅く、南に行くに従って深くなり、地表下0.9 mに達するところも存在する点である。この間の土層がほとんど近世や近代の整地層であることから、現在の境内地は近世以降に大きく改変されていることが明らかとなった。

なお、中世の包含層は、No. 27- 7 地点付近と寢殿、御影堂、五大堂南側で確認していることから、この付近を中心に、中世から近世の遺構が遺存している可能性がある。

個別遺構ではNo. 27- 7 地点で室町時代中期の土壙（土壙2）を検出した。この土壙の埋土は炭化物を多く含んでおり、火災に関連している可能性を示している。

版 图

報 告 書 抄 録

ふりがな	しせきだいかくじごしょあと							
書名	史跡大覚寺御所跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2006-35							
編著者名	前田義明・吉村正親・堀内寛昭							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2007年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しせきだいかくじ 史跡大覚寺 ごしょあと 御所跡	きょうとしうきょうく 京都市右京区 さがおおさわちよう 嵯峨大沢町4		A804	35度 01分 44秒	135度 40分 39秒	2006年6月 5日～2007 年1月25日	60m ²	防災施設 事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
史跡大覚寺 御所跡	史跡	鎌倉時代	埋喪遺構	常滑甕				
		室町時代	土壇、井戸状遺構	土師器、瓦				
		江戸時代	暗渠、瓦溜、土壇	土師器、陶磁器、瓦				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-35

史跡大覚寺御所跡

発行日 2007年3月31日

編集発行 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町 265 番地の 1

〒 602-8435 TEL 075-415-0521

<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町 298 番地

〒 604-0093 TEL 075-256-0961